

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)

禅研究所『峨山和尚法語』研究班

はじめに

本研究は、平成二七年度に大本山總持寺にて嚴修された總持寺二祖・峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌に関連し、当研究所にて『現代語訳 峨山和尚法語』(大本山總持寺・二〇一六年三月)の発刊に協力したことに由来して行われたものである。

そこで、当研究班では平成二八年度に引き続いて『峨山和尚法語』の引用典籍の研究を行った。その際には、予てより行われている曹洞宗総合研究センター宗学研究部門(旧・曹洞宗宗学研究所)の継続研究「道元禪師・瑩山禪師の引用経論・語録の研究」の手法や成果を参考に行っている。

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禅研究所『峨山和尚法語』研究班)

なお、各研究員は限られた時間の中で研究作業を行い、また、出典研究の方法には十分に習熟したとはいえない状況での成果発表であるため、ご批判は免れないと思うが、諸賢の御法愛によって、ご指導・ご教授賜れば幸いです。

凡例

一、本研究は『続曹洞宗全書』「法語」に収録される『峨山韶碩和尚法語集』の内、『峨山和尚過眼集』一篇の出典研究で、凡例・一覧表・対照表から構成されている。

一、一覧表は目次と索引を兼ね、事項名・出典・頁数からなる。

一、対照表は、上段に『峨山和尚法語』の引用箇所、下段

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

に引用典籍の相当箇所を示した。

一、本研究の底本には『続曹洞宗全書』『法語』所収のテキストを用い、部分的に長祿四年・禅林書写本(お茶の水図書館所蔵)を参照して修正している。

一、引用典籍については、第一出典をa、第二出典をb、参考資料をc、更に時代の前後が判明しない場合には参考としている。それぞれの冒頭に略号を付している。一、本研究で使用した典籍は、以下の通りである。

『峨山和尚法語』は『続曹洞宗全書』『法語』から引用し、引用時には頁数・段のみ略記した。

『宏智録』は石井修道編『宏智録(上)』(名著普及会・一九八四年)所収の宋版を参照した。巻数は宋版の内容とし、ページ数は書籍に従った。

永平道元の著作は、春秋社『道元禅師全集(全七巻)』を参照。

永平道元の伝記は、吉田道興編著『道元禅師伝記史料集成』(あるむ・二〇一四年)を参照・引用し、その際には書名を『史料集成』と略記した。

『伝光録』は『曹全』『宗源(下)』所収本を参照。

『曹洞宗全書』『続曹洞宗全書』を参照しているが、引用に際して書名は『曹全』『続曹全』と略記し、巻数・頁数等を示している。

『大正新修大藏経』は「大正〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。『卍統藏経』は「統藏〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。なお、『大正藏』『卍統藏』を参照した典籍は、各項目に巻数・頁数等を示している。

※本出典研究は、佐藤悦成先生を班長に、当研究所の研究員である菅原研州・大橋崇弘・山端信祐が分担して行った。

一 覽 表

『峨山和尚過眼集』

	事 項 名	出 典	底本の頁数	本書の頁数
①	夢裡明明六種在、覺後空空大千モ無シ、	b 『証道歌』	一九頁上段	78頁
②	水中鹽味、色裡膠青ト云、	a 『宏智録』一	一九頁上段	78頁
③	九庵磨尺云、三識同在理心、	a 『法華玄義釈籤』卷二二	一九頁下段	78頁
④	永平老師云 朕兆未萌以前、消息現成二不拘。	b 『弁道法』	一九頁下段	78頁
⑤	古德僧問、如何是回互、答云、是非飯頭、云、如何是不回互、答云、是飯頭、山云、非飯頭。	b 『宏智録』二	一九頁下段	78頁
⑥	喩ハ天曉不露、夜半正明也。	b 『洞山録』	一九頁下段	78頁
⑦	老鼠入牛角ト云ハ、	a 『大慧録』卷二八	二〇頁上段	79頁
⑧	淨潔打疊ト云ハ、	a 『宏智録』四	二〇頁上段	79頁
⑨	三世諸佛、口掛壁上、猶有一人、呵呵大笑、	a 『宏智録』二	二〇頁上段	79頁
⑩	觀彼久遠、猶如今日ト云、	a 『信心銘拈古』 参考『如淨統語録』	二〇頁上段	79頁
⑪	僧問古德、如何是無常說法、師推出枕头、	c 『景德伝灯録』卷一一	二〇頁下段	79頁
⑫	淨相不脱、己見不明。	b 『信心銘拈古』	二〇頁下段	79頁
⑬	身如工伎兒、意如和伎者、	b 『大乘入楞伽經』卷五	二〇頁下段	80頁
⑭	達磨不会、大難大難	a 『信心銘拈古』	二一頁上段	80頁
⑮	意到句到、意句不到	c 『正法眼蔵』「有時」卷	二一頁下段	80頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

⑬	芙蓉楷禪師問投子、佛祖言句、家常茶飯、離此外、有為人所否、師云、汝道寰中天子勅、假禹湯堯舜否、楷欲進語、師以拂子撼云、發來早有三十棒、楷即大悟、	b	『投子錄』	二二頁下段	80頁
⑭	宏智禪師云、驢馱井、奪人也、井馱驢、三千世界百億分身、不用安排只者是、參	b	『宏智錄』三	二二頁下段	80頁
⑮	經曰、阿難問迦葉云、伝金欄袈裟外、別傳箇什麼、迦葉召阿難、阿難應喏、迦葉云、是何(又別本云、倒却門前刹竿)、阿難言下大悟	b	『碧巖錄』二	二二頁上段	80頁
⑯	四山相迫時如何ト語云、山高豈礙白雲飛、竹密不妨流水過。	b	『建中靖國統灯録』一九	二二頁上下段	81頁
⑰	補処菩薩非兜率不住、金翅鳥王非生龍不喫、	b	『永平広録』七	二二頁下段	81頁
⑱	不思量ニテ不回互ヲ現成スル者也	b	『正法眼藏』「坐禪箴」卷	二三頁上段	81頁
⑲	目前無闍裡、此間無老僧	b	『圓悟録』三	二三頁上段	81頁
⑳	利刹衆生説、三世一時説、常説熾然説、間歇ナキ也	参考	『通幻靈禪師漫録』	二三頁上段	81頁
㉑	前念後念、念念不相對、前法後法、法法不相對	a	『正法眼藏』「海印三昧」卷	二三頁上段	82頁
㉒	金鷄報曉天未明	参考	『通幻靈禪師漫録』	二三頁下段	82頁
㉓	當頭時如何、答曰、坐斷命根、又云、不當頭時如何、答云、無回避之所	b	『宏智録』一	二四頁上段	82頁
㉔	常二用ル針ハ、兩頭ニ穴無	a	『宏智録』五	二四頁上段	82頁
㉕	馬祖一喝、百丈三日耳聲シタリシ所	a	『圓悟録』一六	二四頁下段	82頁
㉖	寶殿無人不待立	a	『宏智録』一	二五頁上段	82頁
㉗	我昔シ在マシカハ、一棒ニ打殺シテ、狗子ニ與テ喫セシメン	c	『圓悟録』一一	二五頁上段	82頁
㉘	見聞覺知是道、道は見聞覺知ニアラス	c	『維摩詰所説經』	二五頁下段	83頁

47	古徳云、汝得道スト云ヘトモ、生死岸頭ノ事ニ暗ト云ヘリ、	参考『信心銘拈提』	二八頁上段	85頁
46	毘婆尸佛ノ偈曰、身從無相裡受生、獨如幻出諸形像、幻人心識本來無、罪福皆空無所住、	a 『景德伝灯録』一「敘七仏」	二七頁上、下段	85頁
45	山云、不萌枝上花開ト云ハ、	a 『人天眼目』三	二七頁上段	85頁
44	始終衲僧ノ巴鼻ハ、句外ノ承當ニテアル也、	参考『虚堂集』	二七頁上段	85頁
43	山云、唯一門、而復狹少ト云經文ノ如キンハ、	a 『妙法蓮華經』二「譬喻品」	二七頁上段	85頁
42	古徳云、普州人逐賊ト云ニ、	b 『碧巖録』三 参考『信心銘拈提』	二七頁上段	84頁
41	僧問、山和尚云、恁麼欲得スルハ、則是恁麼人、ナニノ恁麼事ヲカ愁ヘン、	b 『景德伝灯録』一七	二七頁上段	84頁
40	大疑之下ニ大悟在トハ、	b 『大慧普説』一七	二六頁下段	84頁
39	三界唯一心、心外無別法ト、此句ハ獨露身ニハ同シカラス、如何ナレハト云ニ、佛及衆生是三無差別ト云タル間	c 『正法眼蔵』「三界唯心」卷	二六頁下段	84頁
38	大千沙界現全身	参考『禪宗頌古聯珠通集』五	二六頁下段	84頁
37	萬象ノ中ニ、一頭地ヲ出ト	a 『宏智録』四	二六頁下段	84頁
36	也太奇、也太奇、無常説法不思議	b 『洞山録』	二六頁下段	83頁
35	天眞橋上相逢者稀	参考『通幻靈禪師漫録』	二六頁下段	83頁
34	玉發光光還自照	b 『宏智録』一	二六頁上段	83頁
33	明中ニ暗アリ、暗相ヲ以テ看ルコトナカレ、暗中ニ明アリ、明相ヲ以對コトナカレ	b 『碧巖録』九	二五頁下段	83頁
32	永平開山渡唐時、天童浄老ニ問、人人自本発心発性、為什麼迷始ナル、天童云、発心発性汝カ施為ト知レト、云云	参考『正法眼蔵』「陸座」卷	二五頁下段	83頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

48	后又古徳曰、不昧因果ヲ、正因正果ト、云云、	参考『正法眼蔵』「深信因果」卷	二八頁上段	85頁
49	以是經云、如是相、如是體ヨリ、本末究竟等、如是正ノミト、云云、	b『妙法蓮華經』一「方便品」	二八頁下段	86頁
50	以是經曰、豈離伽耶耶求常寂光、罪寂光外別求娑婆、	a『法華文句記』九	二九頁上段	86頁
51	又經云、生ノ處、淨菩薩ノ友タリト云、	a『梵網經』下	二九頁上段	86頁
52	山云、透網金鱗以何爲食、	a『碧巖録』五	二九頁上段	86頁
53	古徳又云、老僧不居明白裡、向何處安身立命セント、云云、	b『碧巖録』一	二九頁上段	86頁
54	僧答テ云、偏正曾不離本位ト云、	b『宏智録』三 参考『靈竺淨慈自得禪師録』五	二九頁上段	86頁
55	心地含諸種ト云、	a『六祖壇經』	二九頁上段	87頁
56	通幻答云、了了無方偶故ニ、	参考『十八般妙語』	二九頁上段	87頁
57	山和尚僧二問云、暗裡分回互ト云意旨如何、	a『宏智録』四	二九頁下段	87頁
58	僧云、混スルトキン所ヲ知ル、	a『宝鏡三昧』	二九頁下段	87頁
59	山云、然リ、十二時中如何得空不過、	a『人天眼目』二	二九頁下段	87頁
60	老師云、三界之中、不現身相本色漢、當恁麼去、	a『宏智録』三	二九頁下段	87頁
61	出三界曰、壞三界無三界、曰矣三界有三界、曰礙三界不壞不失不礙、	c『宏智録』一	二九頁下段	88頁
62	永平高祖ハ、更闌夜靜——溪声入耳	b『永平広録』一〇 『永平略録』	二九頁下段	88頁
63	滿眼滿耳、絶毫絶釐、	a『宏智録』三	二九頁下段	88頁
64	從上諸聖之事、人相授底之一句有否、作一句來、	c『伝光録』四六章	二九頁下段	88頁
65	又云、識身壞滅、如何是金剛不壞身ト。	a『五灯会元』一一「汝州南院慧顛禪師」	二九頁下段	88頁
66	僧大新二問、大新云、山花開似錦、澗水湛如藍、	b『碧巖録』九	二九頁下段	89頁

⑦6	句裡宗曷明宗中の難辨、	b 『宏智録』一	三〇頁下段	90頁
⑦5	三世諸佛ト狸奴白牯トハ、	b 『宏智録』二	三〇頁下段	90頁
⑦4	或人云、一粒在荒田、不耕苗自秀、	a 『宏智録』三	三〇頁上段	90頁
⑦3	雲門云、人喫飯、飯喫人ト云、	a 『雲門広録』下	三〇頁上段	90頁
⑦2	寂寂十方座斷云、座斷ハ殘也、寥寥一境清虛也、此時座斷者盡也ト、云云、	a 『宏智録』三	三〇頁上段	90頁
⑦1	四十九年一字不説ト云ハ、	参考 『義雲録』 c 『碧巖録』三 b 『金光明經文句記』一上	三〇頁上段	89頁
⑦0	此時モ明明百草頭、明明祖師意、	a 『聯灯会要』六「襄州龐繼居士」 b 『聯灯会要』一六「福州鼓山仏心才 禪師」	三〇頁上段	89頁
⑥9	達磨未來東土ト、	a 『聯灯会要』一六「福州鼓山仏心才 禪師」	三〇頁上段	89頁
⑥8	夾山偈云、明明無悟法、	a 『景德伝灯録』一五「澧州夾山善会 禪師」	三〇頁上段	89頁
⑥7	老師云、刀斧斫不開、	a 『宏智録』四	三〇頁上段	89頁

『峨山和尚過眼集』

- ① 夢裡明明六種在、覺後空空大千モ無シ、(一九頁上段) b 夢裏明明有六趣、覺後空空無大千。『証道歌』、『景德伝灯録』三〇、大正五一・四六〇 a
- ② 水中鹽味、色裡膠青ト云、(一九頁上段) a 水中鹽味、色裏膠青。『宏智録』一、一七頁
- ③ 九庵磨尺云、三識同在理心、(一九頁下段) a 三識同在理心、教門權説且立遠近。言庵摩羅是第九『法華玄義釈籤』一二、大正三三・八九三 c
- ④ 永平老師云 朕兆未萌以前、消息現成二不拘。(一九頁下段) b 然則空劫已前之修証也、無拘現成。朕兆已前之公案也、未待大悟。『弁道法』、『全集』六・二六頁
- ⑤ 古德僧問、如何是回互、答云、是非飯頭、云、如何是不回互、答云、是飯頭、山云、非飯頭。(一九頁下段) b 僧問雲門、如何是回互、門指飯頭云、不可喚作飯頭、僧云、如何是不回互、門云、這箇是飯頭。『宏智録』二・拈古、一三三頁
- ⑥ 喻八天曉不露、夜半正明也。(一九頁下段) b 夜半正明。天曉不露 『洞山録』、大正四七・五一五 a

⑦ 老鼠入牛角ト云ハ、(二〇頁上段)

a 老鼠入牛角便見倒斷也。『大慧錄』二八、大正四七・九三〇a

⑧ 淨潔打疊ト云ハ、(二〇頁上段)

a 舉長慶示衆云。淨潔打疊了。『宏智錄』四、三二四頁

⑨ 三世諸佛、口掛壁上、猶有一人、呵呵大笑、(二〇頁上段)

a 三世諸佛。口掛壁上。猶有一人、呵呵大笑。『宏智錄』二、九九頁

⑩ 觀彼久遠、猶如今日ト云、(二〇頁上段)

a 若能觀彼久遠猶如今日 『信心銘拈古』、『真歇清了禪師語錄』下、統蔵七一・七八七a

参考 良久云。觀彼久遠猶如今日。『天童山景德寺如淨禪師續語錄』大正四八・一三五b

⑪ 僧問古德、如何是無常說法、師推出枕头、(二〇頁下段)

c 曰說得底人在什麼處、師推出枕头。『景德伝灯録』一、大正五一・二八三b

⑫ 淨相不脱、己見不明。(二〇頁下段)

b 此是靜想、不脱己見、不明 『信心銘拈古』、『真歇清了禪師語錄』下、統蔵七一・七八〇c

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

⑬ 身如工伎兒、意如和伎者、(二〇頁下段)

b 心如工伎兒。意如和伎者。『大乘入楞伽經』五、大正一六・六二〇 a

⑭ 達磨不会、大難大難(二二頁上段)

a 達磨不会、大難大難 『信心銘拈古』、『真歇清了禪師語錄』下、統藏七一・七八七 b

⑮ 意到句到、意句不到(二二頁下段)

c 有時意句兩俱到、有時意句俱不到。『正法眼藏』一有時「卷、『全集』一・二四五頁

⑯ 芙蓉楷禪師問投子、佛祖言句、家常茶飯、離此外、有為人所否、師云、汝道寰中天子勅、假禹湯堯舜否、楷欲進語、師以拂子撼云、發來早有三十棒、楷即大悟、(二二頁下段)

b 佛祖言句如家常茶飯、離此外別有為人處麼、師云、汝道寰中天子勅、还假禹湯堯舜也無、楷擬進語、師以拂子撼楷口上云、汝發意來早有三十棒分、楷乃於言下大悟、『投子錄』、統藏七一・七五五 a

⑰ 宏智禪師云、驢覷井、奪人也、井覷驢、三千世界百億分身、不用安排只者是、參(二二頁下段)

b 驢覷井、奪人也如井覷驢、三千世界百億身、不用安排只者是參 『宏智錄』三、一六七頁

⑱ 經曰、阿難問迦葉云、伝金欄袈裟外、別傳箇什麼、迦葉召阿難、阿難應喏、迦葉云、是何(又別本云、倒却

b 阿難問迦葉云。世尊傳金欄袈裟外。別傳何法。迦葉召阿難。阿難應喏。迦葉云。倒却門前刹竿著。阿難遂悟

門前刹竿、阿難言下大悟（二二頁上段）

『碧巖錄』二・一五則頌古への評唱、大正四八・一五
五c

①9 四山相迫時如何ト語云、山高豈礙白雲飛、竹密不妨流水過。（二二頁上下段）

b 四山相逼。和尚從什麼處去、師云、渠儂得自由、微云、竹密不妨流水過、山高豈礙白雲飛。『建中靖國統
灯録』一九、統藏七八・七六五a

②0 補処菩薩非兜率不住、金翅鳥王非生龍不喫、（二二頁
下段）

b 金翅鳥王非生龍不食、補処菩薩非兜率不生 『永平広
録』七・四七二上堂、『全集』四・五八頁

②1 不思量ニテ不回互ヲ現成スル者也（二二頁上段）

b 不思量而現、不回互而成。『正法眼藏』「坐禪箴」卷、
『全集』一・一一七頁

②2 目前無闍裡、此間無老僧（二三頁上段）

b 目前無闍梨。此間無老僧。『圓悟錄』三、大正四七・
七二四c

b 目前無闍梨。此間無老僧。『宏智錄』二、頌古三五
則・本則、九五頁

②3 刹刹衆生説、三世一時説、常説熾然説、間歇ナキ也 参考 刹刹衆生説。三世一時説。常然熾然説。説説無欠歇

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)
(二三頁上段)

『通幻靈禪師漫録』大正八二・四八一 a

②4 前念後念、念念不相對、前法後法、法法不相對(二三頁上段) a 前念後念。念念不相待。前法後法。法法不相對『正法眼藏』「海印三昧」卷、『全集』一・一一九頁

②5 金鷄報曉天未明(二三頁下段) 参考 金鷄報曉天未明 『通幻靈禪師漫録』大正八二・四

八六 b

②6 當頭時如何、答曰、坐斷命根、又云、不當頭時如何、答云、無回避之所(二四頁上段) b 當頭時如何。林云。喪了命根。僧云。不當頭時如何。林云。亦無迴避處。『宏智録』一、六〇頁

②7 常二用ル針ハ、兩頭ニ穴無(二四頁上段) a 常用之針兮兩頭無穴。『宏智録』五、三六〇頁

②8 馬祖一喝、百丈三日耳聲シタリシ所(二四頁下段) a 馬祖一喝。直得三日耳聲。『圓悟録』一六、大正四七・七八八 c

②9 寶殿無人不侍立(二五頁上段) a 寶殿無人不侍立。『宏智録』一、六三頁

③0 我昔シ在マシカハ、一棒ニ打殺シテ、狗子ニ與テ喫セ c 我若見。一棒打殺。與狗子喫却。『圓悟録』一一、大

シメン（二五頁上段）

正四七・七六一 b

③1 見聞覺知是道、道是見聞覺知ニアラス（二五頁下段）

c 見聞覺知。是則見聞覺知非求法也 『維摩詰所說經』

大正一四・五四六 a

③2 永平開山渡唐時、天童淨老二問、人人自本發心發性、
為什麼迷始ナル、天童云、發心發性汝カ施為ト知レ
ト、云云（二五頁下段）

參考 法身法性に迷といふことを參す。『正法眼藏』「陸
座」卷、『史料集成』一七九頁

③3 明中ニ暗アリ、暗相ヲ以テ看ルコトナカレ、暗中ニ明
アリ、明相ヲ以對コトナカレ（二六頁上段）

c 參同契云。當明中有暗。勿以暗相觀。當暗中有明。勿
以明相遇 『碧巖錄』九・八六則・本則への評唱、大

正四八・二一一 b

③4 玉發光光還自照（二六頁上段）

b 如珠發光。光還自照。『宏智錄』一、一七頁

③5 天真橋上相逢者稀（二六頁下段）

參考 天津橋上相逢者少。『通幻靈禪師漫錄』大正八二・

四八三 c

③6 也太奇、也太奇、無常說法不思議（二六頁下段）

b 也太奇也太奇。無情說法不思議 『洞山錄』大正四

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

七・五〇七c

③7 萬象ノ中ニ、一頭地ヲ出ト(二六頁下段)

a 萬象中出一頭地 『宏智録』四、三二二頁

③8 大千沙界現全身(二六頁下段)

參考 大千沙界現全身 『禪宗頌古聯珠通集』五、統藏六

五・五〇二b

③9 三界唯一心、心外無別法ト、此句ハ獨露身ニハ同シカ
ラス、如何ナレハト云ニ、佛及衆生是三無差別ト云タ
ル間(二六頁下段)

c 三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別

『正法眼藏』「三界唯心」卷、『全集』一・四四三頁

④0 大疑之下ニ大悟在トハ、(二七頁上段)

b 大疑之下必有大悟 『大慧普說』一七、大正四七・八

八六a

④1 僧問、山和尚云、恁麼欲得スルハ、則是恁麼人、ナニ
ノ恁麼事ヲカ愁ヘン、(二七頁上段)

b 欲得恁麼事須是恁麼人。既是恁麼人何愁恁麼事。『景
徳伝灯録』一七、大正五一・三三五b

④2 古徳云、普州人逐賊ト云ニ、(二七頁上段)

b 普州人送賊 『碧巖録』三・二二則・本則の著語、大

正四八・一六二c

参考 普州人追賊 『信心銘拈提』、大正八二・四二〇c

④③ 山云、唯有一門、而復狹少ト云經文ノ如キンハ、(二七頁上段) a 是舍唯有一門、而復狹小 『妙法蓮華經』二「譬喩品」、大正九・一二b

④④ 始終衲僧ノ巴鼻ハ、句外ノ承當ニテアル也、(二七頁上段) 参考 句外承當 『虛堂集』一二則・示衆、続蔵六七・三三七a

④⑤ 山云、不萌枝上花開ト云ハ、(二七頁上段) a 不萌枝上花開 『人天眼目』三、大正四八・三二〇c

④⑥ 毘婆尸佛ノ偈曰、身從無相裡受生、獨如幻出諸形象、幻人心識本來無、罪福皆空無所住、(二七頁上段下段) a 毘婆尸佛(過去莊嚴劫第九百九十八尊)偈曰。身從無相中受生、猶如幻出諸形象、幻人心識本來無、罪福皆空無所住。『景德伝灯録』一「敘七仏」、大正五一・二〇四d

④⑦ 古徳云、汝得道スト云ヘトモ、生死岸頭ノ事ニ暗ト云ヘリ、(二八頁上段) 参考 畢竟道者生死岸頭事。『信心銘拈提』、大正八二・四一八a

④⑧ 后又古徳曰、不昧因果ヲ、正因正果ト、云云、(二八) 参考 不昧因果は、明らかにこれ深信因果なり、『正法眼』、『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班) 頁上段)

藏「深信因果」卷、『全集』二・三八九頁

④9 以是經云、如是相、如是體ヨリ、本末究竟等、如是正
ノミト、云云、(二八頁下段) b 所謂諸法如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等。

『妙法蓮華經』一「方便品」、大正九・五a

⑤0 以是經曰、豈離伽耶別求常寂、罪寂光外別求娑婆、
(二九頁上段) a 豈離伽耶別求常寂、非寂光外別有娑婆 『法華文句
記』九、大正三四・三三三b

⑤1 又經云、生ノ處、淨菩薩ノ友タリト云、(二九頁上段) a 三者生生處、為淨菩薩友 『梵網經』下、大正二四・
一〇〇九c

⑤2 山云、透網金鱗以何爲食、(二九頁上段) a 透網金鱗以何為食 『碧巖錄』五・四九則・本則への
評唱、大正四八・一八四c

⑤3 古徳又云、老僧不居明白裏、向何處安身立命セント、
云云、(二九頁上段) b 老僧不在明白裏 『碧巖錄』一・二則・本則、大正四
八・一四一b

⑤4 僧答テ云、偏正曾不離本位ト云、(二九頁上段) b 偏正不曾離本位 『宏智録』三、一六八頁

参考 偏正曾不離本位 『靈竺淨慈自得禪師錄』五、統藏
七二・一四六c

⑤5 心地含諸種ト云、(二九頁上段) a 心地含諸種 『六祖壇經』大正四八・三六一b

⑤6 通幻答云、了了無方偶故ニ、(二九頁上段) 参考 了了位裡無方偶 『十八般法語』、『統曹全』宗源補
遺一七五四頁上段

⑤7 山和尚僧ニ問云、暗裡分回互ト云意旨如何、(二九頁下段) a 師云、暗裏分回互。『宏智錄』四、二七八頁

⑤8 僧云、混スルトキン所ヲ知ル、(二九頁下段) a 混則知處 『宝鏡三昧』、『洞山錄』大正四七・五一五a

⑤9 山云、然リ、十二時中如何得空不過、(二九頁下段) a 僧問。十二時中。如何得不空過 『人天眼目』二、大
正四八・三一二c

⑥0 老師云、三界之中、不現身相本色漢、當恁麼去、(二九頁下段) a 三界中不現身相。本色漢當恁麼去 『宏智錄』三、一
六四頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

- ⑥1 出三界曰、壞三界無三界、曰矣三界有三界、曰礙三界、
不壞不失不礙、(二九頁下段)
- c 也無三界可出。也無萬法可了。爾若道出三界。則便壞三界。爾若道在三界。則便礙三界。爾若待了萬法。則萬法紛然。爾若待轉萬法。則萬法擾爾。到此直須不出不在不壞不礙不轉不了不紛不擾。『宏智錄』一、七〇頁

- ⑥2 永平高祖ハ、更闌夜静——溪声入耳(二九頁下段)
- b 夜坐更闌眠未至、弥知弁道可山林、溪声入耳月穿眼、此外更無一念心。『永平広録』一〇・一〇一偈頌、『全集』四・二八八頁

b 夜坐更闌眠未熟、情知弁道可山林、溪声入耳月到眼、此外更須何用心。『永平略録』偈頌、『全集』五・一一八頁

- ⑥3 滿眼滿耳、絶毫絶釐、(二九頁下段)
- a 滿眼滿耳。絶毫絶釐 『宏智録』三、一七八頁

- ⑥4 從上諸聖之事、人相授底之一句有否、作一句來、(二九頁下段)
- c 第四十六祖、丹霞淳禪師、問芙蓉曰、如何是從上諸聖相授底一句。蓉曰、喚作一句來。『伝光録』四六章、『曹全』「宗源(下)」、三八〇頁

- ⑥5 又云、識身壞滅、如何是金剛不壞身卜、(二九頁下段)
- a 如何是金剛不壞身 『五灯会元』卷一一「汝州南院慧

顯禪師」、統藏八〇・二二七c

⑥6 僧大新二問、大新云、山花開似錦、澗水湛如藍、(二九頁下段) b 擧。僧問大龍。色身敗壞。如何是堅固法身。龍云、山花開似錦。澗水湛如藍。『碧巖錄』九・八二則・本則、大正四八・二〇八a

⑥7 老師云、刀斧斫不開、(三〇頁上段) a 刀斧斫不開 『宏智錄』四、一五六頁

⑥8 夾山偈云、明明無悟法、(三〇頁上段) a 明明無悟法 『景德伝灯録』一五「澧州夾山善会禪師」、大正五一・三二四a

⑥9 達磨未來東土、(三〇頁上段) a 達磨未來東土 『聯灯会要』一六「福州鼓山仏心才禪師」、統藏七九・一三八b

⑦0 此時モ明明百草頭、明明祖師意、(三〇頁上段) a 明明百草頭。明明祖師意 『聯灯会要』六「襄州龐蘊居士」、統藏七九・五六b

⑦1 四十九年一字不説ト云ハ、(三〇頁上段) b 四十九年不説一字 四明智礼 『金光明経文句記』一上、大正三九・八六b

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

c 四十九年未曾說一字 『碧巖錄』三・二八則・頌古への評唱、大正四八・一六八c

参考 四十九年一字不説 『義雲録』、『曹全』「語録一」二二頁上段

⑦2 寂寂十方座斷云、座斷ハ殘也、寥寥一境清虛也、此時 a 寂寂十方坐斷。寥寥一境清虛 『宏智録』三、一八七頁座斷者盡也卜、云云、（三〇頁上段）

⑦3 雲門云、人喫飯、飯喫人卜云、（三〇頁上段） a 因齋次問僧。備道人喫飯飯喫人 『雲門広録』下、大正四七・五七一 b

⑦4 或人云、一粒在荒田、不耕苗自秀、（三〇頁上段） a 一粒在荒田。不耘苗自秀。『宏智録』三、二一八頁

⑦5 三世諸佛卜狸奴白牯卜ハ、（三〇頁下段） b 舉南泉示衆云。三世諸佛不知有。狸奴白牯却知有。『宏智録』二・頌古六九則・本則、一〇七頁

⑦6 句裡宗易明宗中的難辨、（三〇頁下段） b 句裡明宗則易。宗中辨的則難 『宏智録』一、三〇頁

『峨山和尚法語』の引用典籍について(二)

菅原研州

一 引用典籍の総括

今回の研究によって、『峨山和尚過眼集』における引用文の出典典籍を大概明らかにし得たと思う。

そこで、当研究の結果得られた知見と、継続して研究されるべき課題を、本小論にてまとめておきたい。

まず、本法語に引用されている文献のほとんどは、峨山韶碩禪師(一二七六―一三六六)の在世時には成立していたものであり、不自然なところは極めて少数だったと判断される。ただし、一部には検討すべき課題もある。

本法語については、既に先行研究¹⁾で指摘されるように、峨山禪師に関わる「抄物」であり、更には瑩山禪師と峨山禪師、また峨山禪師とその会下の僧達による問答が収録さ

れた法語である。

全体の構造についても、先行研究によって「三五条ほどの語句の集録²⁾」とある通りで、経文や祖録の一節や語句が提起され、それに関する提唱、あるいは問答が行われた時の記録となっている。その時期については、本文中に「康安二年十月日請益云³⁾」とあるため、康安二年(一三六二)の前後という峨山禪師最晩年、總持寺内にて行われたものと推定されている。

それを思う時、本法語で直接に問答を行ったと思われる弟子として、先に挙げた康安二年十月の請益の段において通幻寂靈禪師と大源(太源)宗真禪師の名前が見えるが、両禪師の伝記からは、当時總持寺にいた可能性がある。両禪師とも既に、この段階で嗣法は終えているが、更なる参究を重ねていたというべきだろうか。そして、この箇所は請益の形式で行った問答だったのだろう。ただし、他の箇所まで全て同時期の請益であったか確定はできない。

通幻禪師に関連して、今回の出典研究を通して、『通幻靈禪師漫録』に収録されるものと同じだと推定される語句が、三箇所ほど出てきた。これは、峨山禪師と通幻禪師の

関係からすれば、通幻禪師が峨山禪師の言葉を参照したと考えるのが自然であろう。

なお、全体としては、宏智正覚『宏智録』からの引用が最も多く、圓悟克勤『圓悟録』『碧巖録』、大慧宗杲『大慧録』なども典拠として挙げる事ができる。昨年度研究報告を行った二篇の法語には、無門慧開『無門関』からの引用も一定量見られたが、本法語について『無門関』と特定しうる箇所は見当たらない。

また、洞上の宗旨宣揚という観点からすれば、『宏智録』以外にも洞山良价『洞山録』『宝鏡三昧』、真歇清了『信心銘拈古』、芙蓉道楷の語、道元禪師『正法眼蔵』『永平略録』『永平略録』『弁道法』、瑩山禪師『伝光録』『信心銘拈提』などが典拠と見做しうる。従来相伝されてきた洞上の宗旨について、峨山禪師がどのように門弟に伝えていくか模索されていたと考えるべきであろう。つまり、嗣法を終えていたはずの通幻禪師や大源禪師も含めた、周囲にいた門弟たちに、改めて洞上の宗旨を宣揚する意図があったのかもしれないということである。これは、同じく峨山禪師の法語とされる『山雲海月』開示の意図とも重なるこ

とであるが、峨山禪師晩年に、門弟たちに曹洞宗の教えを糺す必要性が出てきたことを示すか。

それから、『妙法蓮華経』や荆溪湛然『法華文句記』『法華玄義釈籤』からの引用が見られたことは、昨年度も論じた通りで、元々比叡山で天台教学を学んでいた峨山禪師にしてみれば、ごく自然なことである。

二 本法語で宣揚された洞上の宗旨

峨山禪師の法語について、特に「曹洞三位」「曹洞五位」との関わりについては、既に先行研究も出ているため、ここでは道元禪師の宗風をどのように把握し、更に伝えようとしていたのかを検討してみたい。

本法語で道元禪師のことを採り上げていることは、既に先行研究^⑤で繰り返し指摘されているけれども、明らかに道元禪師の名前を出して論じているのは、以下の四箇所である(頁数は『続曹全』「法語」巻)。

① 永平老師云、朕兆未萌以前、消息現成二不拘(一九頁 下段)

② 永平開山云、超佛越祖已後、雖得猶是案山子ノ無心ニ

ハマケタリト、云云（二三頁上段）

③永平開山渡唐時、天童浄老二問、人人自本発心発性、

為何麼迷始ナル、天童云、発心発性汝力施為ト知レ

ト、云云（二五頁下段）

④永平高祖ハ、更闌夜静——溪声入耳（二九頁下段）

これらの内、出典が判明するのは①と④である。①は『弁道法』からの引用だと思われるが、現在伝わる同書の文章とは若干相違がある。④は『永平広録』『永平略録』どちらも推定されうる。なお、今回の調査では、明らかに『永平広録』からの引用と思われる箇所（出典②）が見られるため、峨山禅師の手に『永平広録』が存在した可能性は否定できない。

また、②については典拠不明である。『道元和尚和歌集』に収録される「詠行住坐臥」に、「僧都」を「かかし」と呼んだ事例が見られるが、②との関係は無いと思われる。③については、字句が「発心発性」だと伝わっているけれども、「法身法性」であったとすれば、道元禅師が、明全和尚と交わした問答だとして中世以降に知られ、江戸時代には広く道元禅師に関わる伝承として活用されていく文脈^⑧

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

に通じる。また峨山禅師が伝えた伝承としては、明全和尚ではなくて如浄禅師との問答であったことが分かる。なお、この問答は、道元禅師の「疑滞」にも関わってくるものであるが、本法語の筆写時期との関わりで、古い伝承の一つであったことが推定される。峨山禅師門下では月泉良印禅師が、道元禅師帰国時に関する別の問答があったとしているが、これらの断片的記録からは、近世以降は重視されずとも、瑩山禅師・峨山禅師門下で共有されていた道元禅師伝の一部であったとも考えられる。

更に、本法語においては、『正法眼蔵』からの引用も数箇所見られるけれども、それらは『正法眼蔵』の書名を挙げているわけではないため、あくまでも典拠の一つだったと見るべきであろう。

むしろ、道元禅師も重視した宗風と共通する文脈としては、「現成公案」と「無情説法（無常説法の誤記は同義として採る）」を挙げることができる。

①無常説法ト云コトハ、柱ト柱トノ説法也、然間、森羅万象、山河大地、一時説法スル也、（二〇頁上段）

②又現成公案ハ、梅ノ木ヲ梅ト謂スシテ、何トカ云ヘキ

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

ト云時、指當テ一切尽ル也。(二四頁下段)

③山和尚、僧二問云、無情說法ト現成公案ニ差意アリヤ

否、山云、無情說法ハ得所カ在也、古徳云、也太奇、

也太奇、無常說法不思議ト云タリシハ、始テ入所在

也、現成公案ハ、喩ハ梅ノ木ナニト入所カ在ルヘキ、

曾テ法ケナキ以前、其ナル梅木ハ、何ト入所カ有ヘキ

カト、云云、(二六頁下段)

②③のように、現成公案については「梅の木」に関わる

提唱が行われている。「梅華」も、如浄禪師・道元禪師が

しばしば提唱・詠頌の題材にされたため、その教えを受け

たものだろうか。なお、本法語には「梅の実」に関わるも

のも見える。それで、「現成公案」については、梅を梅と

呼ぶ以前の「それ」について論じられるが、道元禪師が

「現成公案」巻において用いる「何必」に通じると思われる。

また、無情說法については、洞山良价禪師が雲巖曇晟禪

師に呈した「無情說法不思議、也太奇也太奇」を受けてお

り、これは『正法眼蔵』「無情說法」巻で道元禪師が情・

無情を分別しようとする心識を絶したところでの絶対的事

象を示される際に提唱されたが、峨山禪師は不思議の「得

所」を問題にしており、無情説法の把握を実践的に行うよ

うに、弟子達に示したものだといえよう。

上記以外にも、坐禅觀や因果觀などの教えから、道元禪

師との関わりに関心が持たれるところではあるのだが、部

分的に過ぎるため本論では割愛する。

三 結論

『峨山和尚過眼集』の出典研究を通して、以下の知見を得ることができた。

①本法語に見える文脈の典拠は、ほとんどが峨山禪師生

前には成立していた典籍である。一部、弟子の語録と

共有される場合があるが、それは矛盾にはならない。

②『宏智録』の強い影響下の下で、「曹洞五位」などの

参究が進んだ様子が分かるけれども、一部では「無情

說法」「現成公案」など、道元禪師が重視した宗旨に

も言及し、広く洞上の宗旨を宣揚しようとする意図が

見られる。

③内容の多くは、峨山禪師が門弟に提唱した教えを記録

したものが、一部には問答が見えている。これら

は、峨山禪師晩年に總持寺にいた会下の僧侶が、一〇年程度の期間にわたって教えを記録されたものだと推定される。

④写本奥書などからも、峨山禪師に関わるものと見て矛盾は無い。

以上、箇条書きとして示したが、今回の研究成果の報告としておきたい。

今後の展望としては、既に先行研究が重ねられているところではあるけれども、本法語を含めた、三篇の『峨山和尚法語』が洞上の宗旨の上でどのように位置づけられるかを検討し、その後の中世曹洞宗へ展開していく前段階の様子の解明を期したい。

註

- (1) 田島柏堂「新資料・峨山韶碩禪師の『仮名法語』について」、『印度学仏教学研究』一四―二、一九六六年
- (2) 椎名宏雄「峨山におけるカナ法語の性格」、『宗学研究』一九、一九七七年
- (3) 『統曹全』「法語」二九頁上段

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禅研究所『峨山和尚法語』研究班)

(4) 飯塚大展「中世曹洞宗における本参研究序説(三)―峨山関連抄物と円応寺所蔵本参について―」、『駒澤大学仏教学部論集』三〇、一九九九年

(5) 田島氏、椎名氏前掲論文参照

(6) 『全集』七・一六〇―一六一頁

(7) 『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)―(禅研究所紀要)四五、二〇一七年)で指摘した通り、本法語は峨山禪師が口頭で示した提唱を、門弟が筆記したものであると思われるため、字句についてはしばしば不正確な記述が混入する。

(8) この問答については、典拠でも示したとおり、中世に偽作され、一時期は『正法眼蔵』に編入されそうになった「陞座」巻に見える。近世以降の主なものとしては、鈴木正三『驢鞍橋』中一七や『永平紀年録』などに見られ、面山瑞方『訂補建撕記』でも採用されていくのである。なお、これらは全て明全和尚と道元禪師の問答である。

(9) 『補陀開山月泉禪師語録』、『曹全』「語録」二一〇四頁上段

(10) 『統曹全』「法語」二五頁上段

(11) 『全集』一・六頁

参考文献(凡例に挙げた文献以外)

河村孝道編著『諸本校永平開山道元禪師行状建撕記』大修館書店・一九七五年